



Title	Call授業の長所と短所
Author(s)	井元, 秀剛
Citation	サイバーメディア・フォーラム. 2006, 7, p. 50-51
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70233
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Call 授業の長所と短所

井元秀剛 (大阪大学言語文化研究科 フランス語教育部門)

Call 授業(Computer Assisted Language Learning)と聞くと、コンピュータを使うわけだから、インターネットに接続し、リアルタイムで発せられる情報をソースにした、音も映像もありきのマルチメディア教育をイメージするだろう。だが、私がここ数年続けている Call 教室の授業は最も古典的な第二外国語の「初等文法」の授業である。扱う道具は異なっても教える内容は同じだから、要するに黒板とチョーク、そしてビデオテープにやらせていた仕事をパソコンにやらせているにすぎない。しかし、これが実に便利なのである。

まず黒板とチョークだが、普通教室だとチョークの粉が舞うし、場所によって見え方に大きな差がある。宿題の解答など、何人かの学生を選んで黒板に板書させ、それを添削するという古典的なやり方があるが、学生の書いたものは結構見にくく、また上の方に書かれていたりすると背の低い私は朱を入れるのに一苦労だった。これがパソコンだとどうなるか。黒板に相当するのはセンター画面で、ここに私が教師機から送信される情報が表示される。目の前に写るのでどこに座っていても条件は同じで、肉筆のものよりずっと見やすい。学生の答案の添削となると、その利便さは黒板の比ではない。まず、宿題は電子データで予め提出させているので、学生が黒板に答案を書き写すというあの無駄な時間がいらない。学生の答案も、教師が行う添削も画面上で行われるから実に見やすい。仏作文など、この種の添削が欠かせないが、普通教室だと、せいぜい一人か二人の答案を見る程度だったのが、Call 教室だと最低 3 人分は行えるようになった。また、絵を見せられるのもよい。昔から図工の苦手な私は母音や子音の発音の説明で図を描いて舌の位置などを説明するのに苦労したものだが、パソコンだとしかるべき絵をちゃんと貼り付けておいて、それを見せ、カーソルを矢印にして、「舌のこの部分を持ち上げて…」などといとも簡単にできてしまう。辞書だって、学生

の面前でひき、項目や例文などを直接見せながら解説できる。阪大生にはそれほど必要はないが、辞書で訳語しか見ない学生に対して、構文や例文などをしっかり参照するやり方を教えるのにも Call はもってこいなのである。また、作文の添削をしているときに、こちらが想定していなかった動詞と名詞の組み合わせを提示されることもあり、また冠詞の選択など、瞬時に答えられないようなことがらでできても、そこはインターネットの出番である。そのような表現を google で引いて、ヒットした件数から、表現の可否を学生の前で、根拠をもって示すことができるのである。

次にテーブルコーダ、最近では CD など使われるが、なんと言っても頭出しが大変である。文単位で 2 回 3 回と繰り返すのは容易ではなく、ほしいときに、的確にほしい音を、しかもその音だけをだすことはほとんど不可能だった。しかし、PowerPoint にして、音声を一文ずつ貼り付けてしまえば、その文が出てきたときに、そこだけ何度も出すことができる。私はまず文を聞かせ、次に唱和させ、さらにもう一度聞かせるというように、Call 教室では 3 度ならすのが基本スタイルになっている。これができるのがコンピュータの賜である。あと、どうでもよいことだが、活用を唱和させるときに、画面にその部分だけふアッーと浮き出させ、音声を聞かせることができる。これがテレビみたいで、何とも楽しく、最初に作ったときはちょっとほれぼれしたものだ。

さらに便利なのが、試験とその採点。毎年学期末になると、作るのももちろん、採点に膨大な時間がかかっていた。これが瞬時にできるのである。使っているのは WebOCM というサイバーメディアセンターが自前で作ったソフトで、穴埋め、選択など、色々な問い方ができ、学生は答案を提出した次の瞬間、成績は何点で、どこが間違ったのか、正しい答えは何なのかを知ることができる。教師の方は採点の手間が全くいらぬ。このため今年は学期中に 3

度定期試験を行ってみた。語学の場合、習得すべき内容が多いから、学期末に一度、にわか勉強した位では身に付かない。そこで毎時間小テストを行ったりするのだが、これはマンネリ化してしまって、毎度のことだからいいかげんにすまそうとする学生も多い。1 課から 3 課、4 課から 6 課というように 3 課単位で 1 回試験をするぐらいが、中学や高校の学習と同じようなリズムで最もよく身に付くのではないかと考えたのである。今まで 1 回だけだったテストが 3 回もやらされるのでは、学生はさぞかしいやがるだと思いきや、さにあらず、これが意外と好評だった。学生自身もこの方が忘れなくてよい、と言うし、今回は悪かったが次で頑張ろう、と思うらしい。3 回目は他の科目の試験もあることだし、省略しようか、と提案したところ、省略せずにぜひやってほしいという反応が返ってきたので、少し嬉しかった。

これ以外に重宝するのは、同僚の岩根先生が作った練習問題のサイトで、授業中に知識の確認でやらせたり、連続して出される活用問題を瞬時に入力する競争をやらせたり、とこれが結構面白い。学生たちもエキサイトするらしく、ここ 2 年ほど岩根先生のクラスと私のクラスと合同で活用競争の大会などを行っている。こんなことができるのも Call 教室ならではであろう。

私自身は、授業中に Call 教材を使って自習させることはしない。自習なら各自が家や教室の開放時間にできるのであって、わざわざ教師がいるときにそれを行う必要はなく、教師の私も持ちぶさたで、耐えられるものではない。また、出席をとる、という行為も私自身は全く関心がない。授業に出ようと出まいと最終的に教科の内容を理解すればよいのであるし、授業は授業そのものの魅力のために出席してほしいのであって、成績をちらつかせた出席の強制などしたくはないからである。とはいえ、毎回小テストをし、10 分の 1 とはいえ、その結果も考慮するといっているのだから、事実上同じことかもしれない。いずれにせよ、Call 教材の使用による自習も、出席のチェックもやろうと思えばやれる Call 教室の機能であることは確かである。

さて、このように書いてきたら、いいことづくしのようであるが、Call 授業には短所もある。その最大のもは教師と学生の間にてきてしまう距離である。別なところでも書いたことがあるが、パソコンは大きく、センター画面まであるので教師と学生との間の物理的距離は、普通教室と比べて格段に大きくなる。また、学生は横向きであるから、教師と顔を合わせる方向にはない。教師との間にはパソコンという機会があり、それを通じてのコミュニケーションだから心理的距離の遠さは物理的距離の比ではなく、学生たちの授業への参画意識も格段に低いのではないだろうか。うまく授業に引き込めなければ Call 教室の内職率は普通教室のそれより遙かに大きいだろう。何せ目の前には彼らの大好きなオモチャ（インターネット）があるのだから……。私が Call 教材で自習させないのはこのせいであり、教科の説明の場面では、学生機にも教師機の内容を映させ、学生が勝手にコンピュータを動かさないようにしている。音声を何度も聞かせるのは確かに便利だが、唱和する声は普通教室に比べて遙かに小さい。数人の学生が小声で応ずるか、大部分はリピート場面でも口パクか、全く無言である。あまりに声が小さいときは「もう一度!」と怒鳴って繰り返すが、この瞬間が私は一番嫌いである。普通教室ではこのようなことはない。3 度のネイティブスピーカーの音声と 1 度の大きな唱和とどちらが教育効果があるのか明らかであろう。センター画面に映る PowerPoint の大量の情報も、ただ、素通りさせるだけでは全く意味がない。下手をすると学生が何もノートをとらなくなる。要するにノートをとるべき情報と、教科書に書いてあるから眺めておくだけでよい情報との区別を学生がしやすいように、与える情報のタイミングとスピード、与え方を教師が工夫すべきなのである。私は Call を使い始めた当初、同じ内容を教えても普通教室の学生の方が成績がよかった。今ではほぼ同じか、場合によっては Call 教室の学生の方がよい。要は使い次第なのである。